

【中学生の部】 環境大臣賞

愛媛大学教育学部附属中学校2年 弘松 詩菜（ひろまつ しいな）

「ペットと飼い主の幸せな最期のために」

私は病気になった愛犬を看取った経験がある。愛犬のことを自分の子供のように思って暮らしてきた。病気になり動物病院に通う日々が始まり、だんだんと弱っていくあの子を見るのがとてもつらく悲しかった。

ある日病院の先生から安楽死の提案をされた。いつも励まして優しい声掛けをしてくれる先生からのその提案に私は怒りがわき先生に対してがっかりした気持ちになった。もちろん提案を受け入れられなかった。とにかく一秒でも長く生きて欲しかったから。家族とも話し合い、治療を続ける選択をした。その時はそれが一番だと信じていたからだ。

治療といつても治るためのものではないのでどんどん痩せて弱っていき、最期はとても苦しんで息を引き取った。

最期を看取った時に、安楽死は犬のため、家族のためにと先生が考えてくれたものだったのだとわかった。

これまでたくさんの飼い主とペットの最期を見てきた先生だから、私たち家族が愛犬を亡くした時に感じる気持ちを理解してくれていたのだ。

愛犬がいなくなつてから、何度も入院させた時間も家で一緒に過ごせばよかった、あんなに苦しむのなら延命せずに穏やかに過ごしていた時に眠るように逝かせてあげればよかったと今も後悔している。死ぬ間際も苦しんでいたので安らかとは言い難い顔で死んでしまった。それが今もとてもつらい。

私は将来獣医になり、動物のためのホスピスで働きたいと考えている。飼い主のほとんどは可愛いペットに長く生きて欲しいと思うものだが、長く生きることだけが幸せではない。ペットも飼い主も満足のいく最期になるような手伝いがしたい。

お別れは悲しくつらいものだが、その中でも幸せな気持ちが残るような最期になる手伝いがしたい。

少子化が進みペットを家族のように、子供のように育てる人が増えている。おそらく今後もそれは続くだろう。家族としてペットを育てる飼い主にとって、我が子のために最善を尽くしたいと思うのは当然だ。

ペットの医療業界は今後も発展していき需要も増え、今より質の良いものを求める飼い主が増えると思う。ペットのためのホスピスの利用者も増えていくと思う。

獣医になり同じ目標を持った人と施設を作り運営するのが私が目指す将来だ。人間も動物も最期を看取るのは悲しくつらい。だがそこにも穏やかな気持ちを添えるためにできることが何かあるはずだ。私はそこに携わる仕事に就きたい。

私と同じように、失ってから後悔する飼い主がいなくなると良いなと思う。そして長生きさせることだけが幸せなことかをよく考えてもらいたい。

死ぬ間際に苦しさではなく、飼い主のことを大好きだという気持ちだけを持って旅立

ってもらいたい。良い最期だったねと泣きながらも笑顔で話せる、そんなお別れが私の理想だ。